

「胃疾患の X 線・内視鏡診断と臨床病理」

金沢大学教授・がん研究所外科 磨伊 正義
 仙台市医療センター仙台オープン病院院長 望月 福治

東京大学第 3 外科

大 原 毅

胃疾患は相変わらず日本ではもっとも多い疾患である。したがって、その診断、特に X 線診断・内視鏡診断・臨床病理診断は、胃疾患診断の基礎となる大切なファクターであり、すべての医師が絶対に習熟しておかねばならない。既に 1960～1970 年代にわが国における胃疾患診断の先駆者たちが、現在にも読みつがれている名著を多数出版しており、非常に有用なものであった。本書は、今日的な視点に立って、X 線診断・内視鏡診断・臨床病理診断のその後の変遷と進歩とを述べており、文句なくお勧めできるものである。ここ 10～20 年のギャップを埋めるものとして高く評価される。

この本の特徴を列記してみると、それはおよそ次のようになる。

この本の基幹をなすものは、臨床病理に基づいた胃疾患の X 線・内視鏡診断であり、その 3 者がどのように必要であるかを説いていることである。そのために、この本ではまず胃癌から入っており、このことはもっとも必要な知識を先に知らせようとする努力であろう。次に、ある意味では極めて個別的・具体的な症

例から全体へ及ぼしていこうとする努力と、また、系統的に理解してもらおうとする努力と両方がなされている。したがって、1 つ 1 つが読み切りのようになっていて、読んでいくとその疾患の全体像が自然と理解されるようになっている。X 線写真、内視鏡写真、肉眼標本写真、病理組織標本写真が豊富に使われているのも特徴であるが、冗長な記載がなくとてもわかりやすい。

更にこれらを発展させたものとして次の 2 点がある。1 つは単に臨床病理の枠を越え胃癌そのものに迫っているところであり、迫力満点である。例えば、集検、内視鏡、化学療法、腫瘍マーカーなどにまでその筆は及び、この辺では一番詳しい。第 2 に、非常に新しい概念を取り入れている。例えば陥凹性腺腫、大腸型・胃型腺腫、消化管ポリープの胃病変やまれな疾患、例えば好酸球性胃炎などが目につく。

臨床病理学は現在においても非常に必要なものであり、もっとも基本的な診断法である。しかし、昨今分子生物学的手法にのみ目をとられて、臨床診断ができない人が増加し

ているのもまた現状である。これは極めて困った由々しい事態であり、1 つの疾患の最終診断である臨床病理学的な根底が全く崩れることとなっているのである。したがって、われわれ臨床家としては自己防衛するしかなく、それがまた患者さんのためになることでもある。本書のようなしっかりとした基礎に基づいた診断をすべての消化管医—gastroenterologist に持っていただき、少なくとも自分の患者の標本は自分で目を通すようにしておけば、自然と診断力は付くものである。

現在でも臨床病理は大変重要で欠くことのできないものであるが、良い臨床病理の本が少なくなった。このような本を書ける人は、長年の症例の蓄積と鋭い目を持たなければならず、その意味ではこのような本が出版される機会は減少してくるのではないかと考えられる。この意味でも本書は近年の良書の 1 つであろうと考える。

● B5 264 頁 図 57 写真 195
 原色図 263 1993 定価 19,570 円
 (税込) 千 400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)